



## 徳川時代の日本大改造(三)

# 小さな政府と民間の力

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



浮月楼の庭園。浮月楼の敷地は、駿河の天領支配の代官屋敷があった場所。

江戸時代の政府(幕府)は近代の政府に比べると小さな政府でした。武家階級の人口は、総人口の五割から七割で推移していますが、幕府も各大名も、多くの武士を役職から外して俸給を三割から五割削減する人件費圧縮の政策を採っていましたから、実際に行政・司法・警備などで働いていた武士階級は人口の二割から四割だったと思われま

す。百万都市の江戸を治める江戸町奉行所の定員は三百名弱で、この人数で現在の都庁と各区役所の業務、警視庁、消防庁、東京地裁や高裁の仕事までをこなしました。もつともこの人数で細かい行政事務が出来るはずはなく、実務部分の多くは民間に委託されました。

日本各地にある幕府天領からの年貢収入は中央政府である幕府の最大の収入源泉でした。各天領に散った代官は一つの代官所で五

万石から十万石の土地の行政と税務を担当しましたが、その代官所の定員はわずかに三十名でした。実際の仕事はやはり民間である村役人にお任せでした。国の基本は幕府が押さえますが、細かいことは最初にルールをしっかりと作って、あとは直接関係者がやる方が上手くいくと理解していたのです。

江戸時代二百六十五年間を通じて、大名たちが幕府に上納する税は一切ありませんでした。その代わり大名は「役」を行わねばなりません。譜代大名は幕府の要職に就き、外様大名は河川の改修や橋の架け替え、城郭の修理、海岸の防備などを行いました。これらの経費は命令された各大名持ちです。

幕府も各藩も、米の年貢だけに頼る収入で、年々拡大する巨

大な経済社会への対応を迫られ、財政上の困難は増加する一方で高。高い民間委託度と幕府藩の財政悪化は、一方で次の効果をもたらしました。

一つは村や町の自治能力の向上と子弟に対する教育の強化です。農村の年貢徴収は村単位で行われ、実務は村役人である名主・庄屋層が代行しました。町の行政も町役人が行い、町を維持する直接費用は町に住む全員で負担しました。このため村役人、町役人の事務所では、有能な人材の育成が不可欠でした。

もう一つの効果は、各藩が殖産に力を注いだことです。田畑の拡大が頭打ちになると、大名たちは、その土地の特産品の開発に知恵を絞りました。現在の名産品の多くは江戸時代の先人たちが開発したものです。